



明治時代における詠史歌の意味(二)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三輪, 正胤 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004532

明治時代における詠史歌の意味 (二)

三輪正胤

明治時代における詠史和歌の持つ意味は、どのようなものであつたかを、詠史和歌集を通して考えようとしたのが前稿^(注1)であつた。しかし、この問題はもう一つ江戸時代との関連において論ずる必要があると考えるようになった。それは、明治の和歌は明治という時代の雰囲気の中で、新しい歴史意識に移行していないという単純なことがわかつてきたからである。それは、明治時代の詠史和歌集において、対象として読まれた歴史的な人物像には江戸時代のものと同通した点があり、むしろ、その内実は江戸時代のものと同様ほどには変わっていないのではないかということである。

そこで、明治時代に最も近い江戸時代後期に編纂され、多くの歌数を収載し詠史和歌集として有名な『鴨川集』の内『詠史歌集』を取り上げて検討する事から始めていくことにしたい。

三 『詠史歌集』をめぐる

『鴨川集』は第一集から第五集までの五編と『詠史歌集』とから成る六部仕立てである。

『和歌大辞典』^(注2)の解説(安東守仁執筆)に拠れば『鴨川集』は「初編は「類題和歌鴨川集」、二編は「類題和歌鴨川次郎集」、以下、三郎・四郎・五郎と続刊。長澤伴雄編。初編は嘉永元1848年、二編は同三年、三編同四年、四編同五年、五編同七年に出版。版本は静嘉堂文庫ほか蔵。活字本として「類題和歌鴨川集」の書名のもとに全編を収めたものが、明治二七1894年交盛館などから出る。当時の有名無名の作者の和歌を、四季・恋・雑に部類し、題別に配列したもの。無名の作者が全国にわたっているのは、投稿や推薦の中から撰んだためである。総歌数約一万一〇〇〇首」と説明されて

いる。また、同じ辞典の『詠史歌集』には「長澤伴雄編。嘉永六一
853年刊。二冊。いわゆる詠史の歌は近世の類題集では雑之部に
収めたが、伴雄の『類題和歌鴨川集』では、文芸的に注目すべき特
殊な分野として別に一書としてまとめた。」（山本嘉将執筆）とある。

この後者の解説には若干の補足が必要である。嘉永六年に編纂され
たのは『詠史歌集 初編』の二冊である。長澤伴雄が収集した詠史
和歌はすべてが同時に出版された訳ではない。明治四十四年の本居
豊穎の序文を付して、大正二年に『詠史歌集 二編』二冊として子
息の（故）長澤六郎の名によって出版されている。したがって当初
の『詠史歌集』は、四冊になる構想の大きなものであったことが知
られる（以下、『詠史歌集』は、嘉永六年版本の三輪蔵本を用いる）。

さて、『和歌大辞典』では、『詠史歌集』が「文芸的に注目すべ
き特殊な分野」として「詠史」の部を立てたことを指摘している。
しかし、そのことの意味はどのようなものであるのか、『鴨川集』
から独立して特別な一書を編纂する事になった編者の意識とは何か
については言及されていない。

この事については『詠史歌集 初編』の序文が幾分かを語っている。
序文は二つある。初めのは嘉永五年八月「洛西陰士瓢々齋」（平
塚瓢齋）の推薦文であり、次のものは伴雄が「大むね」と題して嘉
永五年十一月に記している。

「大むね」は、次のように始まる。

「詠史の歌とて、世に見えそめたるは、天慶六年に、日本紀の饗
宴をさせたまひしとき、分史とて、題をたまはりて、よませられた
るぞはじめなる。それより後のしふどもにも、をりをり見えたり。
其はもと、詩に詠史といふがあるにあらひて、文章の生などの、物
ごのみのすさびより、ふとおこりそめしなれど、学問のためには、
いとよきわざなりけり。それにならへるにかあらん、近きころは、
専ら、わざとよみいでたる歌どものこころ見えしらがへるを、ひろ
ひあつめて、かくはものしつるなり。」（適宜、引用者の判断によ
って句読点・濁点を付した。以下同じ）

日本における詠史の起りを第一に『日本紀』（これは『日本書紀』
であることは言うまでもないであろう）の饗宴に求めている。これは、
前稿にも引用したとおり、現代における研究者も『日本書紀』の饗
宴に求めることと同じである。それは、和歌においての歴史意識は『日
本書紀』の饗宴の会によって形成されたことを言うことになる。

第二には中国の詩の分類による「詠史」を真似て行われ、それが
やや専門領域化して、学問的な手助けとなったという。これは、漢
詩の理念に日本の和歌を対比させ、和歌の勝れた事を述べて、日本
国家を改めて意識させるものとなっている。

この二つの起源をもって詠史和歌は詠みつけられてきたが、現

在はその本源が忘れられて「詠史」という事だけが意識して詠まれていると「大むね」は言う。これは伴雄に無意識的な部分があるにせよ、「詠史和歌」という分野が一般化している状況を追認したこととなつていよう。これは、第一のことに関わりながら、歴史を個人的な事実の並列的連続とする、やや広く言えば、個人崇拜を基本とする英雄像による歴史意識の形成が行われていたということにならう。実際に『日本書紀』の饗宴にせよ、類題集の詠史の部にせよ、それらはすべて特定の個人の、特有の事跡を詠みこんだ歌が創られているからである。更に、『詠史歌集 初編』の出版の背景には、嘉永年間という状況が重なつていふことも考え合わせておかなければならないであろう。それは言うまでもなく、嘉永六年のペリー来航を頂点とする外国勢力の脅威である。この時期の状況は、外国の脅威に應じていかに「日本」を意識したかということである。それは、時としては弱者の虚勢として現れ、時としては強者の権力の誇示となつて現れたことは歴史的事実として多くの報告がなされている故に、ここで改めて言うまでもない事であろう。

この社会的な状況を、伴雄は、『詠史歌集 初編』では、どのように考へているのであろうか。このことに若干関連があるかと思はれる事が、序文に次のように語られている。

「そもそも、この集なるは、神の御名、天皇の御上、はたやごと

なき古人たちの事の蹟につきて、何くれと沙汰したるたぐひすくからねば、いとかしこく罪おかしとも、いひつべかめれど、作者のぎえのきはも、あはれの深さも、かつがつ知られて、すなはち古学せむ梯立ともなれ、ば、かの月花にむかひて諷詠いづなるごとき、調をいたはり、章をもとむるかいなでのと、ひとしなみいふべきにはあらずなむ」と述べている。詠歌の対象は「神の御名、天皇の御上、はたやんごとなき古人」という神、天皇、貴人などの事跡であり、それらの事跡は現在にいたるまで多く取り上げられてきたという。

これは神を頂点とする貴人等によって構成される専制的な構造を認めた発言である。それゆゑに、これら個々人が詠み出す和歌は、「月花」という花鳥風月を対象とする詠歌とは、明らかに相違しているという。ここには、神概念に基づいた国家概念があるとみてよいであろう。この結果、伴雄は当代のことについて「しかるに、このごろ世にいでくる類題しふどもの中には、月花とおなじ列についてたるもあるは、いとまかしこく、なめくこそ覚ゆれ。予がえらべる鴨川集、既に四郎におよびなんとするに、詠史の歌としては、一首も収ざりしは、かかる志のあるによりてなり。」という。つまり、現今の類題集は「詠史」を特に意識することなく従来の部類の一部の中に収めている。しかし、それは明らかに間違っている。「月花」の詠歌を風景歌とするならば、「詠史」歌は、まさに人事歌であり、

そこに一つの理念の表明が要求されているのである。それ故に、『鴨川集』としてすでに第四部まで出版しているが、詠史和歌を一首も入れなかったという。この伴雄の主張は実に明確である。そこに、日本あるいは外国という表現はないものの、それに匹敵するものが意識されていると見て間違いないであろう。

ここに見える伴雄の強い意志は「詠史」和歌の持つ意味合いを充分に認識しているものである。先に、これを単純に歴史的なものと述べたが、それは改めて国家意識と称してよいものである。それでは、その国家を形成する個人の事跡が具体的な様相としてどのように捉えられているかが問題となつてこよう。歌集の内容の検討に移つていこう。

『詠史歌集 初編』の第一冊目は「詠史歌 上」と初めにあり、神祇から始まる。続いて、皇親、文臣、武臣となり、この武臣の中の楠木正成から「詠史歌 下」として第二冊目に入る。この武臣は木下長嘯子で終わり、次に歌人、儒林、孝子、義勇、女流、貞婦、遊女、方伎、釈氏、姦臣、叛臣、逆臣、古戦場、大御代の部類となつてゐる。二冊に分冊された理由は特に認められないが、しいて言えば下巻巻頭で楠木正成を際立たせる目的があつたかもしれない。さて、この分類概念の一覧から留意されるのは、文臣、武臣の扱い方である。これは、その序文に、広く文官は文臣とし、武官は武臣

とし、いわゆる武家は文臣としたと説明されている。つまり、律令制度時代においては、武官を帯びた公家殿上人は武臣と分類し、天慶承平以降の武家の発生後は、武官を帯びた公家殿上人を文臣と分類したという。これは、和歌を支える公家殿上人の力量関係の変遷を考慮しながらも、「武」を名目的ものでなく、実質的な武力という力が意味を持つ身分を前提とした江戸時代的な考えに基づいて分類したと考えられるものである。

次に注意される点は、文臣、武臣に続く人物の分類の方法である。これも序文に「孝子、義烈、姦臣、叛臣など類をわかちたるは漢めいたるわざにはあれど、初学の徒の見やすからむためにとてなり。故実わきまえたる人にいふにはあらず」とある。孝子、義烈などの分類には特別な配慮はしていない。いかにも従来の唐風の概念ではあるが、すべて初学の徒のための配慮によるといふ。しかし、これは、謙遜が過ぎる言葉である。後に見るように、伴雄の意識には長上者への畏敬、更には勧善懲悪的といつてよい道德的基準が強く働いてゐるからである。

こうしたことが具体的に各部類の詠歌対象及び対象者に、どのように現れているであろうか。その対象名称を部類別に若干記してみよう。

「神祇」は、神概念についての七首に続いて、神社は伊勢を初め

として、度会宮、日前宮、国懸宮、名草浜宮、熊野、住吉、松尾、梅宮、日吉祭、貴船、龍田、布留、三輪、鹿嶋、丹生に終わる十六社、神は『古事記伝』饗宴の時に詠まれた神直日神、志那都比古神、須佐之男神、事代主神の四神を初めに、少彦名神、大国主神、杵築、祇園、猿田彦神、天宇受売神、木花開耶姫、釜山、斎宮、香椎、石清水、竹生嶋、白山、藤白、金御歌、北野の二十社、これに詠史二十首、その後、保元物語を読み、平家物語を読み、承久記よみける時の三首、また詠史八首の後、残桜記を書きおへてのあと、詠史三首を並べる構成となっている。

「皇親」は、その名をすべて記すと、白檮原宮(神武)、磐余若桜宮(神功)、軽島明宮(応神)、難波高津宮(仁徳)、近江大津宮(天智)、後大津宮(大友)、明日香浄見原宮(天武)、藤原宮(持統)、乃楽宮(元明)、平安宮(桓武)、亭子院、醍醐院、後三条院、鳥羽院、崇徳院、安德帝、土御門院、龜山院、後醍醐院、同関係の芳野宮他、五瀬命、日本武尊、忍熊王、菟道太子、上宮太子、舍人親王、惟喬親王、貞純親王、前中書王、大塔宮、宗良親王となっている。

「文臣」は、大伴宿祢家持卿、安倍仲磨などに始まり、北畠准后親房卿、北畠中納言源顕家卿、北畠内大臣源顕能公に終わる三十四人である。

次には「武臣」である。塩椎翁、珍彦、道臣命などに始まり、時政、同義時、同泰時、同時頼を経て、相模太郎時宗、青砥基綱、工藤新左衛門、長崎次郎で上巻は終わる。

下巻は贈中将楠正成卿、楠正行朝臣、楠正之、楠正儀に始まり、浮田秀家、加藤清正、片桐且元、真田幸村、木村重成、酒井忠次、木下長嘯子の九十四人で終わる。

次の「歌人」は柿本人麿、山部赤人に始まり、京極中納言定家卿、壬生二位家隆卿、六歌仙に終わる五十七人と一集団である。

次の「儒林」は、源順朝臣、大江広元、熊沢蕃山の三人である。武則に打たれる、曾我兄弟、五郎時政、日野阿新磨の五人である。

次に「義勇」は、老伎直真根子、調吉師伊企、大石良雄、大高源吾の四人である。

次に「女流」は、光明皇后、上東門院、建礼門院に始まり、松下禅尼、千代能尼、阿佛尼、加茂神主基久女、淀君に終わる三十一人である。

次の「貞婦」は、田道妻、上毛野臣形名妻、引田辺赤猪子、松浦佐用媛、袈裟、尼將軍将子、静女、大磯駅虎女、楠正行朝臣母、伊賀局、細川忠興朝臣妻の十一人である。

次に「遊女」は、上総末之珠名、桜見、鬘見、真間手見那、桧垣姫、

伎王伎女、佛女、横笛、熊野、亀菊、江口君、地獄の十二人と一事項である。

次に「方伎」は、白箸翁、巨勢金岡、博雅三位、浦島子、蟬丸、曾呂利新左衛門の六人である。

次に「釈氏」は、役小角、伝教大師に始まり、源空上人、日蓮上人、兼好法師、一休和尚に終わる二十二人である。

次の「姦臣」は、石田光成の一人、「叛臣」は弓削道鏡、平将門、悪右衛門督信頼、木曾義仲、今井兼平、赤松円心、赤松則祐律師、金吾中納言秀秋の八人、「逆臣」は、蘇我宿祢馬子、明智光秀、明智光俊の三人である。

最後は「古戦場」九首、「大御代寿」二首で終わる。

さて、以上の部類内容を一覧するだけでも、先に、伴雄の「大むね」に記された、神を頂点として忠臣に支えられる国家概念が表現されていると理解した事の誤りでないのが了解されよう。

まず、「神祇」の分類においては、伊勢神宮を第一として伊勢神宮の分社を挙げる。続いて、二十二社式に基づく格式による神社が配列されている。これに本居宣長の『古事記伝』の饗宴歌が、本来の『日本書紀』の饗宴歌に取って代わって入れられている。ここに、神概念は「神」を語ることに始まり、宣長を中心として確立した国学が歴史の枠組みを形作っていることが確認される。これは、『保

元物語』『平家物語』『承久記』などの書物が、同類に扱われていることにも関係している。現在においても、その虚構性が認められる故に、歴史物語と称することの有無が問われるこれらの書は、神概念に守られ、それを引き継ぐ歴史の事実を確認する書として扱われているのである。その新たな「神」概念は、『古事記』を基本としているということになる。こうした神概念は、次に「皇親」の部類にも引き継がれている。神武天皇を初めとして累代の天皇は、奈良朝の成り立ち前後、平安時代の聖帝と呼称される宇多醍醐朝、院政期から源平の戦乱前後、それに龜山院から後醍醐天皇へと続く南朝方と、大きく四期に別けられ、それは南朝方の正統性を主張することへと連なっている。この南朝を正統とする考えは、親王の列記においても同じであって、南朝の象徴的存在である宗良親王で終わる形となっている。

以上の二つの「神祇」「皇親」の部類が、南北朝時代で終わっている事は注目される事である。それは、次に続く部類である、「文臣」の部が同じく南北朝時代の北畠一族で終わっているからである。これは、神に発する天皇及び文臣の系列は、南北朝期で一つの区切りをもって語られるという主張とみることが出来る。文武両道の確立を目指した江戸幕府の政治方針は、南北朝時代の理念を引き継いでいると理解してもよいものである。これは、「武臣」の分類におい

でも、ほぼ、室町時代の末までを記し、江戸時代は酒井忠次、木下長嘯子の二人のみを挙げていることも関係している。天皇と忠臣の関係は、文の面では南北朝時代まで、武の面では、室町時代末までとする理念に基づいていると理解される。こうした武臣、文臣の理解は、「歌人」の部類にも顕著に表れ、柿本人麿を「なるかきのもとその身はしたながら ことの葉高くあぶこの神(太平)」と、歌神として詠まれるのに始まり、鎌倉時代初期の定家、家隆をあげ、六歌仙画から「七学に今一くさはたらねども これぞいろ香のかぎりなりける」と歌仙を称えて、歌の世界の神と同列視できることを語って終わる。

また、江戸時代に挙げるべき武臣が少ないとする「武」の衰退論は、正義に基づく「義勇」の四人という少なさとなっている。これに対して「姦臣」、「叛臣」、「逆臣」は合わせて十二人を挙げ、改めて反逆の精神を戒めることになっている。義を褒めるといよりは、逆臣を戒める教訓的傾向が強調されているのである。このことはまた、女性に対しては先ず「女流」の項を立て、初めに光明皇后を「御佛にたむくるあかとなりつらん かたいにそそぐ御湯の雫は(松田直愛)」と、貧しい民に注いだ情は仏への捧げ物となったと詠み、終わりには淀君を「ちりのこる桐のこずえに色はえて そむるははその杜のもみじば(有彰)」と、秀吉亡き後も益々一層模範となる振

る舞いであつたと賞賛する。これに続いて「貞婦」の項で更に鑑となる女性が語られる。これに対するように次に「遊女」の項が立てられ、遊女としての女性に悲しみの情は寄せられるものの、その後を地獄と題して「かりそめのすがたの花にまつはるる くてふの夢のうき世とや見ん(有彰)」と詠じている。遊女のこの世のはなやいだ浮き姿は胡蝶の夢のごとくであり、それは地獄に値するものとされる。女性の生き方に貞節、貞淑を要求する教訓的傾向の強さが知られる。

以上の大勢を受けて、巻の終わりに置かれる「大御代寿」の二首は「国々をそのくに人にまもらせて 君はたひらの都にぞます(和田正主)」「いにしへのいくさのつづみおとかへて ときもる御代とうちしづめけれ(伴雄)」と詠われている。戦乱の時代を過ぎて、それぞれの国の治めも良く、天皇は平和な都に坐すと言い、また、戦乱で打ち鳴らされた鼓は、江戸の当今は御代を守る静めの音を響かせているという。天皇によって平和に治められている国のありさまは、言うまでもなく神の力によるものである。それが、冒頭の「神祇」の部に緊密に結びついて『詠史歌集』は編纂されているのである。

その「神祇」の部は「たがためとたれかおもはんよをてらす 天つやしろも国つやしろも(荷田宿祢春満)」「ほとけらはたまのうてなにいつかれて 神はあめもる小屋のしきやに(本居宣長)」と

始まる。先に国学が歴史意識の枠組みを形成したと述べた。それは、この冒頭の作者にも明瞭に現れている。荷田宿祢春満、本居宣長に続いての第三番は本居大平であり、ここに国学の正統が示されていると理解される。神は宣長系の国学の概念によって理解されているのである。その歌においても、その一首目は、天神、地祇の神々は何物をも区別する事なく世を照らすと言ひ、二首目は、仏は玉台に座し、神は屋の内て天下を守っていると云う。神の大きさを称揚しつつ、仏をもそのなかに包み込んで見ているのである。

以上の江戸時代の歴史評価に関わる問題は、もう少し違った視点から考えることが出来る。『詠史歌集』は、江戸時代の末期において編集されながら、江戸時代の全般的な見通しが欠けているのは、不自然なところがあると言つてもよいかと思われる。前稿で取り上げた『内外詠史歌集』は、明治時代に編纂されたから当然明治の当代までの詠歌を対象としていた。このことは、伴雄の『詠史歌集』の編纂意識に時代を南北朝時代までと制限するもの、言いかねば、伴雄の意識形成に直接関わった、あるいは参考とされた特殊な歴史書があったのではないかということである。尤も、先に述べたように大正時代に出版された『詠史歌集』の第二編では江戸時代までを扱っているから、ここで問題とする事は『詠史歌集』の第一編は、なぜ南北朝時代までで終わっているかという限定はつけておかなければならない。

ればならない。

四 『前賢故実』をめぐって

『詠史歌集』の編纂意識に近いものを、同時代の中に求めてみると、『前賢故実』という書の一つ挙げることができる(以下、『前賢故実』は、明治三十六年翻刻印刷の三輪蔵本を用いる)。

この書物は、その題名からも察せられるように歴史上の賢人とされる人物の事跡を考証し、これに人物画像をも添えたために、主として絵画史の分野で注目されているものである。その序文によれば、人物画像を添えたと言ひ方方は正しくなく、歴史上の著名な人物の事跡を絵画によって表現した書である。しかし、この序文の言ひ分は、歴史上の人物を絵画という判り易い表現を用いて行なった歴史書を著作したと理解しても良いものである。それは全十巻からなる書の序文のなかで、次のようなことを述べているからである。

序文は天保七年(1836)に、菊地武保によって記されている。

「前賢故実之編、為訓童蒙而作焉於戯、我神州、剖判以来、皇統一定、万古不易、治教之盛明、風俗之醇美、所以冠絶万国、蓋由神皇聖后丕承緝熙、内外脩齊之所致也」

童子の為に著作するとの謙遜常套的方法で序文は始まるとは言え、それは判り易さを手段にして歴史を語ろうとしている事は確かである。

それは、次に続いて、日本の歴史はどのように創られてきたかを述べているからである。わが日本は、神国として陰陽の神による創生以来、皇統は絶えることなく不易なものとして存在する。国が穏やかに治まり、風俗習慣の美しいことは、世界に冠たるものがある。

その故は、神たる天皇、聖人たる皇后の広く知識を内外に求めて治めているからであるという。その後、続けて、この恩恵に預からないものではなく、このことの所以を童蒙に教えたいと言う。そして、「賢輔良弼、忠臣孝子、義夫烈女、及文雅才芸之徒」と、儒教的倫理道徳に勝れた忠臣、孝子などの者、殊に義夫、烈女という義勇に勝れた者、また文芸、芸能に勝れた者を掲げると述べている。更に、その対象とした人物の時代範囲は「自上古至南北朝之末、総計五百余人」と述べる。歴史的に模範となる人物を各分野から選別し、時代としては上代から南北朝時代までの五百人余を掲げたという。その時代が南北朝時代までに限定される理由は述べられていないが、「皇統一定」という表現に注目すれば、その理由は本文のうちに見出すことが出来る。それは第十巻の後村上帝四十三名中における北畠親房の評伝に「親房深嘆中興不終、皇統垂絶。著神皇正統記」とあり、『神皇正統記』を皇統の正統を著わした書として高く評価しているのである。また、最終となる後龜山天皇五名中の楠木正勝（楠木正成孫）に、義満が南帝と和を請うたとき雄々しく帝に従ったとし、楠木正

義（正勝弟）は、義満を倒すに奮然と戦い悠然と死したとする記事を見れば南朝の帝に忠義を尽くした「功」が尊重されて、これが「正統」と呼称できるとする意図は明らかにみることが出来る。

ここに、上古より南北朝時代に至るまでの期間に、天皇を中心に勝れた事跡のある人物を列挙することによって歴史を叙述した書と見ることが出来る。

ここに、少なくとも、南北朝期までを対象とした歴史書と認められるものが『詠史歌集』の十数年前に存在し、その歴史への考えの大筋においても類似していることを知るのである。

この『前賢故実』は、天皇を中心としてその時代に活躍した人物、たとえばその初めを神武天皇朝四名として、可美真手命、五瀬命、道臣命、椎根津彦を挙げる。これは、天皇の一統は連綿と続いていて、忠実な臣下によって支えられたとするその事跡に重点をおいているのである。従って『詠史歌集』、『内外詠史歌集』とは、幾分かの視点の違いがあることは承知しておかなければならない。

それでは、この『前賢故実』と『詠史歌集』、それに加えて前稿で扱った『内外詠史歌集』とは、どのような関係にあるのか、個人の事跡をどのように評価しているのかを、いくつかの特徴的な例で見てみよう。

先に『詠史歌集』には「義勇」と「逆臣」の理念に特徴があると

述べた。『詠史歌集』は「義勇」の第一として「壹岐直真根子」をあげ、「かたちまで似れば似しかなまめならん 心をつねにまねますらを（伴雄）」（『内外詠史歌集』も同じ歌をあげる）と詠ずる。

姿形まで似ているといえはよく似たものだ。つねに実直に仕えたせいであろう。その名が「まねこ」とあるのも大丈夫と呼ぶに誠に相応しいことだ、という。『前賢故実』は、応神天皇九年、武内宿禰が筑紫にあるとき、讒訴にあい死を賜った。時に、真根子は宿禰の誠のあることを訴え、相貌がよく似ていることから身代わりとなつて死んだ。宿禰は京に上り、疑いを解いて死を免れたと記す。これに実直そうな真根子の座姿が描かれている。『詠史歌集』は、容貌までも良く似ていたのは、常に真面目に仕えていたからであると、心の実直さを重んじて詠じている。心のあり方は姿形をも変えるものであると、「義」は忠節を尽くすことよって評価されるものと説いているのである。両書は相通ずる理念を持っているのである。

「義勇」の第二には「調吉師伊企儼」があげられている。『詠史歌集』は「今さらになにをくらはん我国の 足穂の稲にあげる身にして（伴雄）」（『内外詠史歌集』は、読み人知らずとしてあげる）と詠う。いまさらこうまでなつて何を食べようというのか、稲穂のたれる食に充分な日本国の民としてと、その意気高い国民性を言う。

これは『前賢故実』が、欽明天皇の時、新羅に遠征して加わった伊

企儼は捕虜となった。幾多の責めにも屈せず、終には尻を食えと言つたがために死にいたつた。その子は父を追つて死に、妻は悲痛な歌を残した。朝廷はその父子の忠孝を賞したという。絵は伊企儼が尻をまくつて嘲笑する姿を描いている。『詠史歌集』は、『前賢故実』が前半で言う伊企儼の新羅に対する日本国の誇り高い心に焦点を絞つて、国家への「義」を詠っているのである。『内外詠史歌集』は、「いたづらにいきながらへば韓国に やまと心のなをたためやも（千浪）」「から人にしりくらへとて終に身の 死にていきなの名は立に剣（昌言）」など五首をあげ、『詠史歌集』と同じく、名を立て、日本国の誉れとなった事を詠じ『前賢故実』の述べる故実すべてを詠じている。

「義勇」の第三番目として『詠史歌集』は、大石良雄と大高源吾を挙げて終わっている。大石良雄の第一首目は「世にしのお色を見せじとしばらくは そめぬ心を花になしけん（治堅）」とあり、その十二首目には「秋の霜に身こそはきゆれ雪のよの いさをは世々のあとに残れり（芳秀）」として終わっている。「義」は忍ぶ事によつて達成され、清冽な雪の夜に散つた「功」は、後の世まで残つたと、赤穂浪士の頭を褒め称えている。国家あるいは主君に忠実に仕える精神が「義勇」であることが了解されよう。続く大高源吾についても「山をぬくちからもともに松の雪 きえてもきえぬ君がみ

さをや(精芳)」「(『内外詠史歌集』も同じ歌を挙げる)と詠まれる。主君に良く仕え、力を蓄え、機会をじっと待った高い志は永久に消えることはないであろうという。『内外詠史歌集』は、大石良雄については、第一首目に「かぎりなき功はよよに残りけり 身はむさしの露ときえても(正矩)」とあり、十二首目に「山しなの落葉かくれの石ずえも くだけて後ぞあらはれにける(有彰)」とある。これらの歌の底に流れるものは、死して後も忠臣としての「功」が長く残っていることへの賞賛である。『詠史歌集』の「義勇」と同様な理念によって詠まれていると判断できるものである。

これを「女流」の項にみれば、さきに、『詠史歌集』の女性は、貞節、貞淑であることが求められているとした。これを三書に共通する松下禅尼の例にみてもよい。『前賢故実』は、後深草天皇朝三名の一人で、その事跡は時頼の母として、明障子を手ずから貼った事を記して「凡物有小損、早補之、則不至大壊」と物事は大事に至らない内の小事に注意すると教えたので、時頼は勤儉を守り「政理寧静」となったという。これを「母訓悔」のためと評している。絵は禅尼が障子を貼りながら、後ろを振るかえる厳しい表情を描いている。『詠史歌集』は「大かたはしらじな松の下かげに のりとるあまのふかきこころを(務)」の一首で、松の下で障子を貼る尼の深い心の内は多くの人には判らないであろうという。『内外詠史歌集』

も同じ歌を初めにおき、八首目に「たらちねの母となるべき人はみな この老松によるべかりけり(正夫)」と終わる。教訓的傾向は最も強く現れており、女性に求められる徳性の典型として語られている。「義勇」を支える女性に必要な資性が求められていると言ってもよいであろう。

こうした「義勇」の士に支えられて、その頂点に立つ天皇はどのように詠まれているであろうか。

『詠史歌集』「皇親」の部に、第一代の天皇としてあげられる神武天皇について「もろこしのひじりの君にまさるとは つたはるみよを見てもしるらん(務)」(『内外詠史歌集』も同じ歌を挙げる)という。中国の聖帝に対してのなんらかの劣等感をもっていたものが、神武天皇からはいかなる低い位置にもなることはなかった、いや優れ勝っているとの宣言ともとれる強い調子で詠われている。これは第二番におかれる神功皇后を「出たたすみふねの浪のなみならぬ君がみいつはかしこかりけり(杉本清雄)」と詠み、新羅遠征に出発する姿の神々しい雄々しさを称えている事にもつながっていく。外国(中国、朝鮮という)に対して日本の力が発揮され、それを正義とする意識が強く表明されているといつてよいであろう。『内外詠史歌集』においても、神武天皇と同じく神功皇后の第二首目には「から人のぬかづくまでに神国の 神のみいつをしめしけるかな(高世)」

と詠まれている。皇后の戦勝は誇らかなものとして捉えられている。

こうした聖帝に仕える「文臣」も、『詠史歌集』では、中国を意識した者として詠われている。第一番の大伴家持は「もろこしのこしのたち山ぬけいでて 今さへさやに見ゆることのは(契沖)」(『内外詠史歌集』は人臣の部に入れて、同じ歌をあげる。ただし、「もろこし」は「もののふ」となっている)と、越の国にいた家持は北国の立山を越え、唐の国さへも超えて、いまここに鮮やかに士大夫の剣を抜き、勝れた言葉伝えてきたよという。和歌が漢詩の世界を乗り越えた事への賞賛となっている。これは第二番の安倍仲磨を「もろこしもおなじ国とやみかさ山 さし出る月を夢ならで見し(契沖)」(『内外詠史歌集』も同じ歌を人臣の部にあげる)と詠み、唐の国も日本と同じ国と捉えた結果、三笠山を夢ではなく、実景のものとして見たのだと、日本国を唐と同等とする気概に溢れたものとなって、家持と同一線上のところまで詠われている。『前賢故実』は孝謙天皇朝七名の内の安倍仲磨を、唐の国で厚遇され明州で別離の和歌を詠み、これを漢詩として示したところ唐の国の人々は「感泣」したという。両国の詩歌に秀で、誇りうる人物像が創造されている。こうした日本国は唐の国と同等または優位とすることから、日本の独自性の主張へとつながって、南朝方の「文臣」につながっていく。その一人、北畠親房を『前賢故実』は、先に述べたように、南朝の将としてよく

奮闘し、『神皇正統記』を「皇統一定」の精神を示すために著したという。書物を机上に文人学者風な重厚な容貌で絵は描かれている。『詠史歌集』では、「いまはよにしる人もなきしき島の やまとだましひ君ぞつたへし(務)」(『内外詠史歌集』も同じ歌をあげる)と詠まれている。この江戸時代の終わりごろになるとすっかり忘れられていた「大和魂」は、親房が伝えきたものだという。これは「大和魂」が今こそ必要とされる時代であることを念頭に置いている。「大和」が意識されるとは、その心が相手としての「外国」を問題としたときに必要になるものであろう。

これが「武臣」においては、第一番の神代「塩椎翁」を三首目で「しほつちのをぢにしあらずはわたつみの 深き心をたれかはからん(秋実)」(『内外詠史歌集』も同じ歌をあげる)と、塩椎翁が海神に仕える深い心のほどは一体だれができたであろうかとその思慮深さを賞賛する。こうした思慮に富んだ武勇が賞賛の対象になっていくのである。

この「武臣」の鑑が南朝の将、殊に楠木正成に見られるとするのは重要な視点である。『前賢故実』は、都合四頁を用いて、戦略に勝れた「功」を称え、子息正行には「忠義」を説き、その死に当たっては、帝はその策を用いなかったことを悔やみ泣き、「天下義士皆為之号慟」とする。絵は帝輿を守る武士の一团と親子の跪く図と

を載せる。

『詠史歌集』の初めの二首は「さみだれて大内山もくらきよにほふもあやなあたらたちばな(力石重遠)」「民草にまじりてさぐる橋の雲の上までかをりぬるかな(直養)」(『内外詠史歌集』も同じ歌をあげる)とある。世の中が乱れ、天皇さえもその位置が危ないときに、正成は天皇の側近としてその橋の香を匂わせたが、惜しい事に報われなかったといい、また、人々の間で苦心惨憺する正成の名も心も、天皇にまで届いた事だと、臣下としての立場からいかに忠義を尽くして天皇の為に役立つべきかという「功」の尊さを示している。これは後醍醐天皇をめぐる事件においても同じ視点で語られている。児島三郎高德を「うちつけにかくことのはは世にくちぬ 名を桜木にきざむなりけり(景樹)」(『内外詠史歌集』も同じ歌をあげる)と、急ぎ記した言の葉は桜木に刻まれて、朽ちることのない名を残したことだという。同じく村上義光については、「さくら花ちるべき時とちりにけん いさはは高しみよしの山(千広)」(『内外詠史歌集』も同じ歌をあげる)と、桜の花は散るべき時をしっかりと弁えて散ったことだ、その故に吉野山に勲功はいやがうえにも高まったことだという。天皇に仕えてその名と功をあげることが、尊ばれていることはいままでもない。『前賢故実』の記す世界も同じ事と理解される。児郎高德を「忠勇」に励む徒とし、

刀剣で木に詩を刻む野武士風な姿を描き、村上義光については、護良親王の身代わりとなつて壮絶な死を遂げたと言ひ、敵軍を踏みつけ投げ飛ばす勇姿を描いている。

次に注目されるのは、豊臣秀吉の朝鮮遠征(いわゆる文禄慶長の役)をどのようにみるかの問題である。これは、先に『詠史歌集』の「武臣」が室町時代の末で大筋が終わっていた事にも関係している。秀吉の第一首目は「民草の中より出てから国に えださしおほふ桐もありけれ(大橋長広)」という。桐の紋を家紋とする秀吉は、名もない一人から身を立て、遂に唐国(朝鮮)までもその傘下に入ってしまったと、勝利を手にした武将として詠われている。こうした朝鮮との関係の捉え方は一貫しており、その将であつた加藤清正については、次のように詠まれている。「清正朝臣朝鮮の役にて不尽山見たる所」と題して「神風になびくを見ればふじのねの ふもとなりけりもろこしが原(幸年)」という。朝鮮遠征において勝利した姿を、富士の雄姿になぞらえつつ、神風の吹く日本に平伏した朝鮮として描写するに至っている。朝鮮遠征は事実として日本の勝利と捉えられている。このような視点は、『内外詠史歌集』では、いくぶんか調子が低くなり、秀吉は「大ぞらにかけりし龍の末つひによもの海さへのまんとぞせし(知紀)」、加藤清正は「風おこす虎てふ名のみ聞てだに 草木をののくもろこしが原(則忠)」と、勝

利は得なかったものの充分に日本国の威勢は示されたと捉えられている。

以上の比較からすると、『詠史歌集』と『内外詠史歌集』とは、海外の国を意識し、日本を強く意識した点において共通のものがあると認められよう。言ってみれば日本に目覚める事を目的として編纂されているのである。それは形式的な面も含めて『詠史歌集』を手本として『内外詠史歌集』が編纂されたと認められるのである。

これに対して、『前賢故実』も、その趣旨はこの二書と同一なのが認められ、人物の採択においても半数以上は一致している。しかし、その時代をほぼ南北朝時代に限った点において『詠史歌集』とは共通するものが認められるとはいえず、細部においては様々な相違点も見られる。『詠史歌集』の典拠とした書については、もう少し探索しなければならぬ問題が残っていると考えられる。

いずれにせよ、こうした書を列挙していく中で見えてくることは、『内外詠史歌集』は、明治という時代を新しいものとして捉えた書ではないということである。基本的には宣長の国学の系統に拠った歴史意識であり、南北朝時代に至るまでの忠臣の精神を継承し、唐（中国、朝鮮）と比較しつつ優れた点を探索し、神功皇后の新羅遠征、秀吉の朝鮮遠征などを日本にとって意義あるものとする視点が貫かれているのである。それを、人臣の立場に見たとき、男性の理念と

しては「義」が、女性のそれには「貞節」が求められたのである。

こうした視点は、前稿に取り上げた明治初期の『詠史百首』においても、変わりなく表現されていたと言ってもよいのである。

注

- (1) 「明治時代における詠史歌の意味(一)——晶子の新しい和歌の背景——」(『人文学論集 第十八集 二〇〇〇・三』)
- (2) 『和歌大辞典』(明治書院 昭和六十一年刊)

本論文は、平成十一年度大阪府学術奨励基金に基づく研究の一部として執筆した。